別紙１－１

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※　　第　　号

氏　　名　藤井　爽

論　文　題　目　Cultural Translation and Representation of Mother-Daughter Relationships: A Study of Works by Maxine Hong Kingston, Amy Tan, Fae Myenne Ng, and Mei Ng

論文審査担当者

主　査　名古屋大学教授　　松下千雅子

委　員　名古屋大学教授　　長畑　明利

委　員　名古屋大学教授　　星野幸代

委　員　名古屋大学准教授　Dylan McGee

別紙１－２

1.　本論文の構成と概要

本論文では中国系アメリカ人女性作家のテクストに描かれる母娘関係を主題にしている。マキシーン・ホン・キングストン Maxine Hong Kingston の『チャイナタウンの女武者 *The Woman Warrior: Memoir of a Girlhood among Ghosts*』(1976)、エミィ・タン Amy Tan の『ジョイ・ラック・クラブ *The Joy Luck Club*』(1989)、フェィ・ミェン・イン Fae Myenne Ng の『骨 *Bone*』(1993)、メイ・イン Mei Ng の『イーティング・チャイニーズ・フード・ネイキッド *Eating Chinese Food Naked*』(1998) を分析対象とし、母娘という世代間のギャップを、中国からの移民の母親とアメリカ育ちの娘という歴史的、文化的なバックグラウンドと交差させることで、母娘関係を文化翻訳という文脈において解釈することを試みている。

全体のイントロダクションともなる第一章では、中国系アメリカ人女性作家のテクストを、ヴァージニア・ウルフ、アードリエンヌ・リッチ、マリアンヌ・ハーシュらによる西洋文学における母娘関係の表象研究と対照させることで、本研究で用いられる文化翻訳という切り口の有効性を明確にしている。ホミ・バーバの議論を援用しつつ、政治的な歪みを明らかにする文化翻訳の可能性を示したうえで、本論文で取り上げる四つのテクストを「翻訳的な語り」として提示する。さらに、文化翻訳が行われる中心的な場所としてチャイナタウンを挙げ、翻訳的な語りの主体を成り立たせる物理的および心理的な要因を考察している。

第二章では、『チャイナタウンの女武者』において、主人公がチャイナタウンにもアメリカ社会にも、自身のモデルとなる女性像を見つけられないことが、主人公の沈鬱な心理状態を生み出していくプロセスを分析している。彼女の状態が良いのか悪いのかという観点ではなく、こうした不安を描きだしたという点で価値がある作品であるとしている。

第三章は、『ジョイ・ラック・クラブ』について、オリエンタリズムを内面化している作品だという従来からの批判に応答するかたちで議論が展開する。ヒロインの一人の娘は自分にとっての中国人である母親との思い出を振り返りながら、亡くなった母親の喪失に向き合い、その過程で彼女は母親に対する意識と自分自身に対する意識を変えていく。中国人という政治的アイデンティティが個人的な記憶に結びついていることから、テクストにおいて、母娘関係という個人的な家族の関係と、中国人であるという政治的なことがらが、複雑に交差していることを明らかにし、テクストがオリエンタリズムの内面化とは言えない、と論じている。

第四章では『骨』の主人公レイラが、暗い記憶であふれるチャイナタウンに住む母と、チャイナタウンの外に住む恋人との間で揺れながらも、過去の記憶を解きほぐしながら記憶に向き合い、外に出る心構えをしていく様を考察している。先の二作品と同様、娘は母親の別の面を再発見していく中で、母親を置き去りにする罪悪感から解放され、自分を形作った場所の一つとしてチャイナタウンを認めることで、いかにして葛藤に折り合いを付けていくかを論じている。

第五章ではメイ・インの『イーティング・チャイニーズ・フード・ネイキッド』を扱い、母娘関係の中のセクシュアリティに関する問題を探っている。主人公のルビーは母親に同性愛的

な欲望を抱いているが、本論文は、彼女が食という文化習慣とセクシュアリティを並置する語りの中で、両者が文化的に分類されたものにすぎないことに注目している。彼女にとって、親子の愛も性愛も同じ愛であり、彼女はどちらも気兼ねなく行える場所を探しているにすぎない。また、小説のタイトルは、従来の読みのように小説の中の出来事ではなく、自らの人種的・民族的なアイデンティティとセクシュアリティに対して心地よい状態でいられる未来の可能性として論じられている。

結論である第六章では第二章から第五章を振り返り、まず各小説における母娘関係が、それぞれに異なる意味を持っていることが確認される。キングストンの母娘関係は相反する二つの文化を娘が母から受け継ぐ複雑な空間になっており、タンの小説においては娘が自身のアイデンティティを、記憶を通して再構築する場となっている。インの『骨』でも同じように母娘関係は自身について再確認する機会を与えるが、同時に母親に依存する危険性も明確にしている。メイ・インの小説においての母娘関係は、セクシュアリティの分類が人為的に構築されたものであることを明らかにする役割を果たしている。本論文では、これらを語るヒロインの語りが、翻訳的な語り」として提示され、彼女たちの語りの失敗は、言語や文化における翻訳が決して完璧にはなされないことを明らかにし、批評家が翻訳を審美的な観点より倫理的に読むことへの変遷を促していると結論されている。

2.　本論文の評価

本論文の価値は、中国系アメリカ人女性作家のテクストについて、母娘関係という従来からの主題に加え、「文化翻訳」という概念を導入し、クロスオーバーさせたことである。著者は文化翻訳を必然的に失敗するものとして定義する。そして、翻訳の失敗こそが、文化間の差異を明らかにし、マイノリティの語りが主流文化に吸収されることを阻むものとなっていると指摘する。それゆえ翻訳の審美的な側面を強調するような議論はむしろ文化翻訳で明らかにされる翻訳の政治的な側面を隠してしまう。本論文は、第三世界の文化を理想化し第三世界の抱える問題を矮小化して、その根源を覆い隠すポストコロニアル理論の落とし穴を指摘し、翻訳者の置かれている歴史的、文化的、経済的な立場を審美的な観点で覆い隠すような解釈に対して警笛を発するものとして、高く評価できる。

一方、本論文には構成的な面における弱点、すなわち、論文の主旨を述べる thesis statement が読者に明確に伝わらない、という点が指摘される。このことは、本論文が独立したイントロダクションを持たず、比較的長い第一章として書かれていることに原因があると考えられる。

これは重要な指摘ではあるが、本論文全体の評価を損なうものではなく、むしろ、申請者の今後の研究活動に役立てるべき点として指摘されるものである。本論文の成果は、アメリカ文学研究、比較文化研究に新たな知見を加えるものであり、審査委員は全員一致して、本論文が課程博士を授与されるに値するものであると判断した。